



沙皇年表

項

特別
~5
6698
5



沙金袋目錄

初冬

十月望夜

神女月

飯花

時雨

亥子

木葉

付朽葉
落葉

霜

火燒

豐明夜會

雪

冰

冰柱

霰

付霰
電酒

鷺

鴨

千鳥

水鳥

鷹將

炭竈

炸火

衾

神樂

網代

寒菊

琵琶花

素花

早梅

一

長

初冬

月

荷前 佛名 針扣行 長分

辛肉立春 歲暮 雜冬



沙金袋 頌

冬

初冬

黄河ありそく水よ流る初冬水 光正
初冬や二重初のみ子 一有
初冬を問りし言ふ初冬水 素白

十月の夜

わろくもや初冬はるる後乃の夜水 正伯

冬や事お日うら白おしく衣久
 正在
 小春とくきふ縁入やふそ始め
 正村
 うら刀今く色うへるくまん布おれ
 素白
 霜ら質入雪 うらうらん昔衣
 善種
 廻文
 さらるんうま衣とらうおんお月
 光正

神せ月 付十夜

さじりれみ巾をゆるせ神せ月
 利休
 非礼ふげとるる理やあると神せ月
 勝明

心要ふ神をうし月よ横河ぬ
 行直
 天神とりりくおさたり神せ月
 宗光
 下もろるとあふの礼う神せ月
 安成
 帳通下とるゆらうめ神せ月
 成政
 文月よ書けうとてよ神せ月
 長正
 誓文とくしんつうとくや神せ月
 清水
 先月とるや福の子の神せ月
 以專
 誓言紙よの佛やのせん神せ月
 月
 神ももしおくや梅の神せ月
 幸以
 小春よのうぬとらうりそ神せ月
 治之

信濃のうらやまや流世の神皇月 正在
 玉神のじよのしあうの神皇月 光正
 世の神皇のしあうの神皇月 一有
 南のうらやまのしあうの神皇月 素白
 おまのしあうのしあうの神皇月 善種
 おまのしあうのしあうの神皇月 正伯
 信濃のうらやまやむの神皇月 月
 神のしあうのしあうの神皇月 頼廣
 おまのしあうのしあうの神皇月 以專
 おまのしあうのしあうの神皇月 保友

大坂堀山

おまのしあうのしあうの神皇月 松安
 おまのしあうのしあうの神皇月 忠利
 おまのしあうのしあうの神皇月 松安
 おまのしあうのしあうの神皇月 定勝
 初言乃の神皇月
 おまのしあうのしあうの神皇月 素白
 おまのしあうのしあうの神皇月
 おまのしあうのしあうの神皇月 宗暉
 おまのしあうのしあうの神皇月 景秀

二階堂

飯花

日一のこなる久のよのあつたふり小まふが 堺 宗次

浮つと光を清くはつてや 冬下 無為

出産り子こよの折しそ席の光 宗清

ふらつひの風も和して たうと光 善種

よまのこころも いじつて や 素白

時雨

とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた 宗平

松尾や とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた 月

とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた 日

とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた 重英

とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた 昌次

とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた 安成

とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた 素白

とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた 月

とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた 翁舟

とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた 正近

とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた とくしつちりあつた 一有

〜〜〜〜〜
正在

〜〜〜〜〜
月

〜〜〜〜〜
正貞

〜〜〜〜〜
友之

〜〜〜〜〜
正種

〜〜〜〜〜
光正

〜〜〜〜〜
霖月

〜〜〜〜〜
松安

〜〜〜〜〜
武方

〜〜〜〜〜
一有

えそあおのな 福永の村あり 一武

おつくし 河原あり 正宿

お初ら日 照あり 日

〜〜〜〜〜
善種

〜〜〜〜〜
善種

〜〜〜〜〜
月

〜〜〜〜〜
月

家

朝日新 亥乃子の 併や 祢山
正信

清代をるを麒麟の並る家丸
 光正
 おまめここひの初やま子餅
 勝明
 口のうらやよまうくのけく餅
 忠政
 りらうらやまの子まの夜祭
 春元
 大まうや偏益かとのまの子餅
 正在
 大坂昌一
 正重
 うまのま書みまの申のうれ
 利重
 姫路
 喰のうらやらん脾胃のこのらる
 一有
 正伯
 清のうらやひのうらやれ餅
 正伯
 黒のうらやまのまの餅
 喜

大まうやひのうらやまの餅
 素白
 うらやらの餅のうらやまの餅
 月

木葉 付落葉 朽葉

鶏といらん 宿のまのまの餅
 道清
 おいぞそ風の本の葉のわらひ
 友之
 ともまのまのまのまの餅
 正伯
 岩の肩のまのまのまの餅
 正在
 光正
 りらうらやまのまのまの餅
 雅次

大坂 友之

正在

正在

光正

雅次

冬より春と向ひの形や木のころも

安明

木の葉もや綴る絡り空の切

一有

故人のつらげあふりも

さだむりよとわたりし

木の葉もらふと秋の木の葉も

善種

木の葉もけさやあふりも

素白

木の葉よのつらむ絡り

一武

木の葉の葉もあふり

太山

經宣

つらむ絡りあつるや梅

成政

らるるあふり木の葉のつら

素白

霜

木の葉の天の形づくの形

善種

木の葉のあふりもや

勝明

木の葉のつらむ絡り

大坂

常久

木の葉のつらむ絡り

日

納元

木の葉のつらむ絡り

暹

可友

木の葉のつらむ絡り

泉河

宣永

木の葉のつらむ絡り

堺

宗安

木の葉のつらむ絡り

堺

盛次

新日山立まも色あくしし霧ね 塚 一武
孫くく新日や々々々霧ね 太源
霧ね巧も々々々霧ね目子 大坂 則正
霧ね若り々々々々々

篠原らちまく霧ね霧ね 北村 宗清
立推く霧ねや人ね 同
霧ね乃垣生小屋う霧ね 井邑 喜之
冷清く々霧ね立地形う 清水 清正
日表を忌く鬼門う霧ね 河列金田 吉重
くあく換くの霧ね霧ね 正在

竹た々々霧ねおくの霧ねね 正伯

先神一周忌止若り
霧ね塔り二重々々々霧ね 同
天りく結く換と立々々霧ね 素白
霧ね乃よ立ひや花つの霧ね 同
霧ね乃地を鏡波根乃三ね 同
竹川や立く換中名霧ね 勝明
山あひよ胆乃立ふり霧ね 橋 重吉
霧ね乃乃く不霧ね今霧の霧 善種

三十一三回忌

抄

未久一三十一二の書在 先正
書乃の叙傳くくしめる本立小 昌廣
紙以巾一ふてしをさふいおわあふ 井上 正家
掃きやあふし書あふる後年の瘡 正種
書とと物塩乃少と物と物と 月
そりかんとる書の叙や物乃上 頼廣
書乃の叙乞りや虫乃家切 一十
書初りの書冷り瘡もふるふあふ 親信

太神文法系より

書書の天乃乃うふ神乃の處 金田 治長

書乃神書やとそ野のあふひあり 宗暉

なりの書よりうとくさふ

時然うん一後や 傑く書の花 正伯
うん書の書本の書乃乃也と物書 一有
書よのころの花さふ物や書乃の色 翁舟
時乃乃のく 叙や今乃物乃書 直治
と物乃乃のくうんうんうり物乃書 善種
書乃の叙納る代もり箱根山 為宣

廻文

あつめ一の野も白書の初める 家勝

史焼

此史焼いじり乃白もや祇の園 二階堂 景秀

とやいけい乞てふ祇堂と社小 素白

此史焼乃うやあつと神楽苗 勝直

此史焼やよる人のあつと流ま 翁舟

此史焼や大祇小祇のまふふと 光正

此史焼のあつと日やふと神あつと 正伯

豊明名書

九重入らふやあつと乃あつとと 紹

此史の明月もとらとあつと徳 素白
八角とこもあつとの明乃此影あ 正伯

書

ふたつあつと人皇乃あつと外 最勝院 澄栄

あつとあつとあつとあつと山 喜多 為宣

鶴毛あつとあつとあつとあつと 大坂 頼廣

あつとあつとあつとあつとあつと 三木 新十

あつとあつとあつとあつとあつと 三木 霖月

あつとあつとあつとあつとあつと 三木 知重

あつとあつとあつとあつとあつと 三木 東宜

ありの元は天よりと降りより
 雲の世にちりしひきり書りて
 子形なりきりありしひきり書
 昔の世にちりしひきり書
 物りのひきりしひきり書
 うんともや書りておの書のま
 雲の元はちりしひきり書
 解書やうしる書おの神の法
 六親よひきりやひきり書
 大書よひきり書おのまもり書

丹南村
以專
秀
頼廣
日
親信
要西
友雪
燕守
宗家
吉如

書りやわゆめありしひきり書
 孝文よひきり書
 書り元と世にちりしひきり書
 月引て自の世類り書り元
 うし書りの解し元と書り元
 大書よひきり書
 書り元と書り人や書り元
 野の元と書り元
 書り元と書り元
 書り元と書り元

大坂
了首
喜之
安明
清正
正秀
幸全
正近
正村
日
松安

併書ハ花ハハ松ハ心々ハハハ
 書ハハハ松ハハハハハハハハハ
 乾坤ハハハ根ハハハハハハハハハ
 見ハハハハハハハハハハハハハハハ
 武ハハハハハハハハハハハハハハハ
 家ハハハハハハハハハハハハハハハ
 海ハハハハハハハハハハハハハハハ
 甲方ハハハハハハハハハハハハハハハ
 りハハハハハハハハハハハハハハハ
 花ハハハハハハハハハハハハハハハ

了首

和刻全并 正盛

真海

北村 宗清

日

一少

大坂 貞因

吉信

一子

榮 安春

西武伴ハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

且ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
 仲ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
 白ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
 夫ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
 心ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
 各ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
 一ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
 雪ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

大坂表多留 爲宣

井上 隆展

正守

堀 重利

金田 知休

長正

堺 一武

松安

此心はつゆのち花そよぶ葉の松の枝 宗清
 始松乃香いささつりの白菌く非 正重
 夕の葉もやかんかりとる雪の綿 光林
 ちよひとらふとめてとる雪の花 素白
 万葉や一路雪き山雪乃花 月
 雪う天の嵐と雪よがりしり 一有
 月うつく雪あつらふ雪さしり 紹節
 くと他もしつとさうもの今雪の雪 正伯
 うら雪くくはよ白妙の雪原 月
 藤乃葉よ雪よ雪帯りよ乃花 春元

あまかきや元来非情の松の雪 正在
 松うさよは流るるうやるあくの雪 月
 毛い又目の風あらしし雪乃花 本間 三成
 南枝お枝のうらや梅と雪の系 脚田 俊雅
 雅伯津よ雪やげ中し六川の花 良松
 雪花乃ちらりしゆら花のさむくれ 三成
 ちよひ琴よるるたぐん雪の雪 翁舟
 ちるふしとあやるとあや神の雪 正伯
 雪よよましとらふ雪さしり雪の雪 月
 丹雪よしつとあや雪の雪ららる 善種

熊野丁ふ句

あつらひきかひもつちやいつく孫 善種
雪の清山よんふ山もや里方の元 日
大は敷の天狗のあきつら雪 孫 日
うてふあまの肌綿あしし影の雪 親信

丹波海女

山さくらひもつちまた若乃小葉雪 清泉 宗秀
海奥てつひの元くる神を乞ふ 貞良
孤舟一葉よ東岸のなつら雪乃な 光正
らつらつらねとらんせつら雪の元 久重

陰徳のそふらつらつら雪女 仲之
年長く又ゆり神や 若中 雪女 政延
りしあつらつら雪の元くる雪女 正種
雪女あつらつら雪の元くる雪女 重利
雪女あつらつら雪の元くる雪女 教心
雪のそふらつら雪の元くる雪女 素白
お雪お雪あつらつら雪の元くる雪女 日
竹の子あつらつら雪の元くる雪女 正伯
あつらつら雪の元くる雪の元くる雪女 日
あつらつら雪の元くる雪の元くる雪女 清泉 宗秀

聖
可
是
姫路神吉

梅梅りある欄干乃雪女 可是

やまゝしよの人をよむとひの雪女 頼廣

神のまの屋をたうららの雪女 月

かまひふる夜のまの雪女 重利

をのつらうをやとるく雪女 秀秋

とふ人や雪女 人をも雪女 光家

閑帳の天りくうの雪女 素白

十とせのこめらりよ十一

さるる乃らをたうらる

雪佛とらびぬ雪女 同

悲このぬき力なりきり

方へをくりたり

月乃おの雪女 佐如乃雪女 光正

先神 長引丸雪女

る神 雪女

とらうやおの雪女 宗暉

とらうの雪女 蓋羅

とらうの雪女 光正

あまの雪女

乃ら

十五

丸をくして未だありのつむや竹の雪 正在

長八丸一周忌よ

雪らくもと氷やとみこしは華樂 宗畔

雪る乃冥加をとらや一大寺 素白

雪佛とらやまん丸一周忌 善種

おちりくくこ回忌り

縁子福の神や乞ふせの雪仏 翁舟

雪はく人考くい止觀と大部 素白

氷

山乃池あきくいのんせぬ氷く弗 氏野 忠清

ふるももし中や終るん厚氷 餘末 重次

雪の袴と名張るもと氷うる 姫路 外友

氷とや派乃字もこゝろあまの面 松安

ちりうけよ氷の衣さか乃川 姫路相野 安方

氷くいのももしとらあふ殿アなる 宗信

をのつらう後程はちく氷く弗 一武

後川ちるありりなきまると氷く 正在

あむもく一終る乃神の氷く 松尾 重次

あわつを流る心氷乃衣く弗 井里 行正

月乃雪化よ氷やうらむる
底冷乃うらハあつさ氷うれ

重吉

あ武弁よ物あくうら子

松安

うらむ

あ物乃あつさ氷じさ氷

大坂村 宗清

池も川も氷やうらむる

正種

あひさじさあつさ厚氷

日

氷うらむる氷や

松浦 意順

風乃あつさ氷うらむる

常順

あやあつさよ氷候や厚氷

一平

あつさ乃氷てあつさ

河内國 永興寺

あつさよ氷うらむる

大坂 道清

あつさ乃あつさ氷うらむる

日

あつさ乃あつさ氷うらむる

可友

あつさ乃あつさ氷うらむる

光春

あつさ乃あつさ氷うらむる

一有

あつさ乃あつさ氷うらむる

光正

あつさ乃あつさ氷うらむる

素白

あつさ乃あつさ氷うらむる

正伯

あつさ乃あつさ氷うらむる

日

流るる系ぞらたぐく氷乃の家う碑

正伯

氷柱

雪屋の影もあめころの氷柱の乳
 光正
 尺若くやさうれた氷柱乃のあ衣
 一有
 株のよ引半の鼻はくく氷柱うか
 大坂 納元
 とがねるん残 願乃氷柱うか
 落葉
 影の口乃氷柱や 揚枝 雪女
 片山 道德
 うらうらハあく舞とくま氷柱か
 正伯
 ぬい親を悲とま氷乃小庭のさ
 素白

霰 付霰電酒

わらうのつらうの雪り大丸雪
 整字
 うらうの雪や 露乃玉あく道
 田中 正業
 うらうく雪うあ石う玉霰
 一有
 雪佛 星佛 一のあく道うか
 武村 宗清
 せん部 一周忌
 去年やけぬくつゝの霰えの玉丸雪
 光正
 雪佛 一のあく道うん玉霰
 月
 十七回忌の追悼よ日敷と

よき

きよとくやぶる徳六千ありてくさ
光正

ゆきとくやぶる徳六千ありてくさ
素白

よきとくやぶる徳六千ありてくさ
正伯

よきとくやぶる徳六千ありてくさ
日

とく徳六千ありてくさ
宗畔

よきとくやぶる徳六千ありてくさ
交子

世の

きよとくやぶる徳六千ありてくさ
善種

きよとくやぶる徳六千ありてくさ
光正

きよとくやぶる徳六千ありてくさ
一有

きよとくやぶる徳六千ありてくさ
頼廣

きよとくやぶる徳六千ありてくさ
正伯

きよとくやぶる徳六千ありてくさ
家勝

きよとくやぶる徳六千ありてくさ
以專

きよとくやぶる徳六千ありてくさ
日

きよとくやぶる徳六千ありてくさ
義定

きよとくやぶる徳六千ありてくさ
親信

きよとくやぶる徳六千ありてくさ
正近

泉列石津

廻文

あられそと川よふふより雲うれ 重利

鶯

鶯のさの念やうらふ 昆陽の池 正伯
 鶯のさく派るうらふ 多戸合 素白
 鶯の鶯の并うらふ くらけ家 月
 鶯のさくさくさくさくさく 念の 光正
 浪波や鶯の念のさくも 花 月
 口をうのさくさくさくさく 歌ふ 一有

色い又あ神のさくさく伊勢の海 正在

鶯

ねりひのゆ首ぶけさくさく池の鶯 松安
 さる天よせうらうらわさくさく 善良
 鉄砲やさくさくさくさく 正全
 世の中やさくさくさくさく 貞則
 さくさくさくさくさくさく 素白

千鳥

わいの流るまきまうや流の流るまき
 文孝
 高きうまふさねかふかの川まき
 頼廣
 一好流やあうりふさまき流
 嘉羅
 ふ年まきあふさう地よまきまき
 正種
 一まきまきまきまきまきまき
 素白
 陰陽のつらひらんとら下り下
 紹良
 つらまきまきまきまきまき
 正伯
 一まきまきまきまきまき
 月
 十丈のまきまきまきまき
 正在
 佐乃口のまきまきまきまき
 光正

雲の雲らまきまきまきまき
 善種

休る

赤あまきまきまきまきまき
 正守
 橋下まきまきまきまき
 橋下やあいのあつまきまき
 正在
 まきまきのまきまきまきまき
 素白
 まきまきまきまきまきまき
 一有
 和田海まきまきまきまき
 元徳
 まきまきまきまきまきまき
 正伯

鷲の鳴るの谷やうらむのいけづら
とりのしらけのうらむのいけづら
じくをとりけりや鷲の爪花
正伯
正在
光正

鷹狩

鷲の鳴るの谷やうらむのいけづら
とりのしらけのうらむのいけづら
じくをとりけりや鷲の爪花
正伯
正在
光正

鷲の鳴るの谷やうらむのいけづら
とりのしらけのうらむのいけづら
じくをとりけりや鷲の爪花
正伯
正在
光正

廻文

わきのうらむのうらむのいけづら
勝明

炭竈

炭竈へは梅のうらむのいけづら
炭竈や火煙の中の四方を
炭竈も中よのうらむのいけづら
炭竈はうらむのいけづら
正伯
正在
素白
光正

切て焼く炭のくまもや池田炭 一有

炭火

百方通あり

火のまもや	目なゆらりわら女	おんたのひうううやあま炭	煙中のまも炭のあまこ	田が裏つこりあまを	埋中のまも梅のまのり	火のまも	百方通のまも
正信	元徳	伯貞	宗晴	重吉	貞徳		

あまのまも	あまのまも	あまのまも	あまのまも	あまのまも	あまのまも	あまのまも	あまのまも
正伯	正伯	正伯	正伯	正伯	正伯	正伯	正伯

家 付紙

わくろくの家乃くもかふ利を
 貧乏くもせひきりけりし家
 下子の家くひりたるや併續飯
 うくくの家おやじくくくのお塚
 大源 松安 素白 宗次

神樂

見のふの神系つこくくめか
 こんくのこくくや備前の神神系
 元盛 一合

あひまや一代つらくくの里神系 正伯
 よねのらんも焼いまひと神系 月
 とそくくくくくく神系し女お 月
 ねかしくくくくくく神系 素白
 派よくくくくくく神系 光正
 此神系の終りし物る安見くく 善種

網代

網代もや海老上扇の鏡の寸 善種
 りんくくくくくくくく 正伯

うらつひのいふこころ人難唯尔を
翁尾の豎おのりたる網代水
正伯
素白

寒菊

多量のわらわら果ての冬もふ
冬このふもあつるり存ま
多量やらよりと歌く今物のお
為宜
妻
一子
素白

琵琶花

さくらやかた一才と琵琶の音
太山
謙也

月の影とらやあつる琵琶の心
一武

茶花

茶の香い別家あつる一重りお
大坂
吉重
茶の花のさくらも冬やうん林
未元
あつる茶花のさくら一重りお
正伯
茶の香いも茶のさくらも冬やうん林
一有
らやあつる茶花のさくらも冬やうん林
素白

早梅

さやをさうんよの梅の心 森本 貞長
 さやをさうんよの梅の心 光正
 さやをさうんよの梅の心 素白
 さやをさうんよの梅の心 一有
 さやをさうんよの梅の心 教心
 さやをさうんよの梅の心 河別松系 武次
 さやをさうんよの梅の心 雷 定勝

荷前

さやをさうんよの梅の心 素白

さやをさうんよの梅の心 吟夕

佛名

さやをさうんよの梅の心 塊 以專
 さやをさうんよの梅の心 翁舟
 さやをさうんよの梅の心 善種
 さやをさうんよの梅の心 一有
 さやをさうんよの梅の心 素白
 さやをさうんよの梅の心 正伯
 さやをさうんよの梅の心 喜之

六六

龍や霞佛りみ蛇り玉の種 光正

鉢扣行

鬚僧や月下り乃門を鉢扣 貞利
毛や又ゆ三は忠弁扣 素白
毛もハ勢りあつてさく髪や鉢扣 正伯

花分

をのくや袴さく玉 門へ 宗時
花分の身やうさめりうくの派 正種

豆をうら折やふり鬼の角 松安
花分や鬼あつて赤い赤守豆 頼廣
案文のうさめりうくの派 要西
はまめよりうさめりうくの派 云保
わさめりや花分の身あも一巻うさ 月
白まめいせりうの派り横目か 正伯
串とさうと花分のおほそやあつた 月
花分の身よまもるる鬼子くれ 一有
鬼りあつた花分のもや被流のり 素白
年然り取取やとも床の浦 正村

花分

花分

年然るに存すもくまうし日勝りか
つりまめりよのこ喰るもやるに分れぬ
多し船も言も紀氏う、云々ある
善本
善種
月

年四立春

立まや同初なる年一乃日後
年一乃四のまら古今乃の始め
ままや年一乃四方作保保子
年一乃四(まそ)立入門乃松
年一乃四のまていこまの四海小
一有
正在
月
納元
善種

立まや天下一年一乃四此の
おいらく光とらそくろ冬のま
年一乃四いふふらありくまの守
素白

歳書

年一乃四も世とられたる師を求
座もくく信世然や年の書
何とまうく光いれまのひそ年の書
年一乃四いふけそ村の師を求
まのひそ年一乃四のあう
まのひそ年一乃四のくまの守
正伯
要西
北村
宗清
言貫
可友
勝明

其の年のられもいふらん人りれ
 カリといふ年とせし人のあ 横山 松安
 徳のり方事もいふらん 日 秀秋
 るといふやといふ年一の言 正種
 十二月三日のいふらん 勝明
 日ありといふのいふらん 智 直重
 くらん捕やといふ年一の言 森本 秀榮
 きふまのらつといふ年一の言 正近
 ありといふ一日の言一 翁舟

年一のいふらん

徳といふとあるといふ年一 女保
 徳といふといふ年一 次長
 八書といふ七十日といふ年一 一有
 昔といふ一年一 日
 ありといふ年一 日
 三人といふといふ年一 光正
 年一といふといふ年一 日
 ありといふといふ年一 日
 以てといふ年一 友親
 徳といふといふ年一 素白

子の月... 素白
 金... 月
 令... 月
 糸... 善種
 外... 月
 お... 常空
 ひ... 正伯
 ら... 重吉
 乃... 西武

雑文

髪... 長石
 獨... 一十
 う... 雅次

先... 人丸感徳竟...

ち... 岫雲
 空... 利昌
 羽... 玄保
 勝... 紹光
 保... 正信

徳ありてせむ方多しの珠敷一有
ふまもりや南無の弘法忠政
のふりやとくほや熊野乃さん紀列田花
さん花のふりよふびのふち得利
治るや天下正伯奉存留曲

廻文

あふふいふふふふふふふふふふふ大坂川
正永

沙金感

明曆三酉年十月吉日
貞安前町丸屋庄三郎

予カ祖道遊軒耽ツケル和歌之餘
以テ諛諧滑稽警鳴ウケル于世山本
氏西武從ニ學之ヲ久用ル心之ヲ
勤メ竟傳ヘ其蘊焉ヲ屬者哀輯ル
諛諧秀逸之可シ為世玩好
者名曰沙金囊請テ跋ラ於先
考尺五子時ニ疾病彌留令ス

囑予應其需想夫詖諧者
戲詭之言似甚易者如其
精巧有至難者易則人人
用之難則非學不至學乃
資博攷而成此斯書之所
以編也於戲囊中之金人
取而用之也器物寶玩裝

飾雕鏤之巧拙則在其用
之之精粗何如爾

明曆丁酉孟冬上浣懷德堂永三跋



